

最後に

河野家の過去帳からルーツを調べたいと思い、家系ルーツの調査会社、NHK総合テレビ「ファミリーヒストリー」でおなじみの、二〇一二年からレギュラー番組以後、多くの著名人の家系図を作成する専門会社。株式会社トラディション・ブルーの秦様に依頼する。過去帳二冊を提出し、できれば河野家のルーツと思われる愛媛県（伊予）まで遡ってくださいと依頼する。

二冊のうち古い年代の過去帳から一ページにある戒名。

寛文九巳酉年閏十二月廿六日、圓空院入玄道融居士、御初代市左衛門様、行年六十七才とある。生誕が慶長八年（一六〇三）になる。この年号は二冊目の過去帳、阿波國名東郡島田村、菩提寺、真言宗、壽法山光明院本願寺に現在までの系図は現存する。この本願寺系図で一番古い年代は、元禄十二卯年、芳月浄慶信士俗名、伊右衛門とあり、何歳で没とは記されていない。この本願寺は現在も菩提寺である。これからすると河野家の一番古い人物は、過去帳の御初代市左衛門様となる。この時の菩提寺は過去帳に妙永寺とあるが、島田村の本願寺以前の菩提寺になる。この妙永寺は、おそらく徳島市の中心の寺町に感応山妙永寺がある。おそらくこの妙永寺が菩提寺である。近くに河野家の氏神様と言われる大山祇神社が在る。（写真）この大山祇神社は愛媛県の大三島に大山祇神社の本社が在り、河野一族が昔の阿波藩以前に持って来たと思うが本社の大三島の大山祇神社には資料が残っている可能性があるかも。しかしながら調査会社の秦様、徳島寺町の妙永寺にたどり着くと、戦災で寺全体が焼失して、新しく、資料も全焼した為ここで調査が頓挫する。そこで現在の菩提寺、真言宗、壽法山光明院本願寺にて河野家系図を調査作成。二冊目の年代の新しい過去帳がそれである。（系図別添付）

過去帳の年代の古い菩提寺が寺町の資料焼失の妙永寺となれば愛媛（伊予）のどこから来たか、どの程度の人物なのか今のところ判明できない。しかしこの人物「御初代、市左衛門、戒名が「圓空院入玄道融居士」寛文九巳酉年閏十二月廿六日行年六十七才とあり、過去帳にも妙永寺と記されている。なのでおそらく徳島寺町の妙永寺であろう。戒名から人物を

判断するに相当位の高い人物と思われるが、この古い方の過去帳の戒名は位の高い人物が何代も続いている。だが文化三年丙寅年八月四日、亮光院勝賢日浄居士、御五代半様、行年四十九才とある人物は寺の名前が本妙寺と記されている。この寺は淡路の洲本にある。次に記されている戒名、文化二乙丑年三月十八日、春光院智浄日完大姉、右御同人様御室大津伊之助様御先代縫殿助様御女、行年四十五才とある人物も本妙寺である。次の戒名も文化三丙寅年十二月廿八日、圓理院真覺道源居士、御六代亀蔵様行年二十六才とあり、この人物は、妙永寺と本妙寺、二カ所に碑アリと記されている。これらの一冊目の古い方の過去帳の人物は徳島市寺町の感応山妙永寺が戦災で焼失の為頓挫する。しかし、調査会社の秦様が河野家に関する資料を何点か調べてくれたのがある。が資料の中に戒名と合致する名前が見当たらない。

あとがき

先祖のルーツが初代市左衛門、慶長、一六〇三年生誕から河野家の過去帳に残った事は貴重な事である。この令和の後の時代に、古い戒名や更に遡った愛媛（伊予）の時代が判明する可能性が有るものと思う。今治市風早町からどのように移動したか、かなりの位の高さから大三島の氏神、大山祇神社に末社移動記録がないか、楽しみが残る。

追記

初代河野市左衛門（一六〇三年誕生）以前のルーツは、菩提寺、感応山妙永寺が焼失（戦災）した為、記録が途絶えてこれ以前のルーツは判明できない。この妙永寺の位置は現在の徳島市寺町に在るが、一二二一年の昔は富田荘と言う地名のようで、眉山の山沿いである。妙永寺を中心に一km位南に河野家の屋敷跡が今現在は、臨濟宗妙心寺派瑞巖寺（写真）にこれは、後に蜂須賀家が阿波藩をおさめる事になり、河野家は島田村に移転させられ、この瑞巖寺になったとのこと。反対側一km位北に河野家が伊予の大三島の大山祇神社と三島神社を分社として現存する。（配置図）この三島神社の境内に三島神社の狛犬の碑がある。その記に一二二一年に承久の乱で功績のあった伊予の河野通久が富田荘の地頭に任じられた際に今治市の三島大明神（大山祇神社）を分記したとある。更に一二八一年の蒙古襲来二回目、弘安の役の時、博多への上陸を阻止した功績のある伊予の御家人河野通有が有名である。一二二一年の阿波の地頭通久と一二八一年の伊予の後家人通有は直系の一族と思われる。一二二一年の通久と一二八一年の通有と一六〇三年の我が過去帳の初代市左衛門が立地は同じと予測できるが菩提寺が同一ならば、直系と推測されるが残念ながら戦災で焼失し記録はない。



資料添付順

- 一、大山祇神社の写真(三島神社)
- 二、徳島県史料 第二卷阿府志 徳島県史編纂委員会昭和四十二年(宝暦から天明年間)
- 三、雑誌「最強の水軍三島村上」
- 四、寺町の妙永寺周辺の配置図
- 五、加茂名小学校



大山祇神社（三島神社）

徳島県史料 第二卷 阿府志 徳島県史編纂委員会 542

(宝暦から天明年間)

三四二

レシ詩也 礼記 雜記ニ云内子以ニ鞠衣裘衣素沙ニ注内子トハ卿ノ適妻也 今ハスヘテ妻ヲ内ト云也 莫ニ對ニ月明ニ思ニ往事ニ損ニ君ノ顔色ニ減ニ君年ニ云云 イツレモ此詩ヨリ出タル村ノ号ナランカシイブカシ

脚咋別 同郡穴喰村ヲ上古ハ言トニヤ日本書紀十八代履中天皇之二嬪大姫郎ツ姫高鶴郎ツ姫之兄鸞住王是讚岐国造阿波国脚咋別凡二族始祖也

南海記第九卷ニ曰人王十八代履中天皇六年ニアタツテ鯽魚磯別王ノ女姉妹二女ヲ以テ后宮ニ納レテ寵愛シ玉フ其二姫恒ニ歎息シ玉フコトアリ天皇奇シミ玉ヒテ汝タチ何ヲカ歎ヤ 對云妾カ兄鸞住王ト云フ其人トナリ強力ニシテ輕捷ナリ八尋ノ屋ヲ馳越テ遊行シ逐ニ不レ還住吉ノ辺ニ居住ス其面会セサルコトヲ歎ト也 天皇其強力ヲ悦テ使ヲ以是ヲ召鸞住王卑賤ニ交リ強力ヲ友トスル事ヲ好ミ儀則ヲ正シ君長ニ對スル事ヲ喜マス此故ニ不レ参来 重使ヲ以テ召セトモ猶参来セス其後廢テ召サス鸞住王北テ阿波国

脚咋ノ邑ニ匿 脚咋ハ今ノ肉咋也野根ノ邑ニ相連也野根氏ハ其遠裔也 又鸞住王讚岐国ニ出テ那珂郡ニ居住ス強力ノ者ヲ聚メ力競ヲ事トシ壮勇ノ者ヲ友トシテ相嬉メリ 二好ノ希フニ依讚岐国造トナシ玉フ鸞住王卒シテ後馴致ノ豪友其亡跡ヲ慕ヒ社ヲ造リテ祭レリ今云飯山権現是也 其子孫相統テ是処ヲ守ル其邑ニ喬木有ケルヤ高木ヲ以テ氏トス是ヨリ大力ノ者ノ出ル事今ニ不レ絶 近世ノ高野山ノ常菩提院及ヒ高木右馬助杯云大力其裔也 故ニ飯ノ山ヲ力山トモ云又野根ノ山邑ハ土佐ノ内ナレト阿波ニ近シ 世々阿波ニ倚テ武命ヲ受ケ独立シテ天正ノ頃ニ至ル時ナル哉今長曾我部氏ニ逐レテ家ヲ失フ野根ノ里人諷テ曰野根ノマネシテ阿波土佐マネナ身ハ程々ノ程ヲ嬉メト也 昔ノ人ハ野根モ阿波土佐ニ並フト思ヘリト云云 按ニ阿波穴喰同土佐野根兩所城主皆鸞住王ノ裔ニテ元木氏ナリシカ天正ノ始ニ落城ス家永クツケリ 阿府志卷第二十四終

阿府志 卷第二十八

阿波国 赤堀良亮輯

旧姓及旧家部

名東郡

早雲氏 富田浦八幡宮神主從五位下忌部連早雲伯耆守

家ハ其先麻植郡ニ神代ヨリ粟ノ日鷲神マシマシテ其

末孫川田村ニハカリ忌部越磨ト号日和志命ヨリハ幾

十年ト難量自今百年計以前ニ前ノ神職有故立退

ニ付麻植郡高越并八幡両社ノ神主早雲氏ヲ被召寄

川田村ニ舍弟ヲ跡役トシ残シ嫡男家ヲ再興セリト云

ヘ共 越磨ヨリ千有余年シカモ嫡孫ナリ尤忌部ノ神

ニ附家ハ有故テ讚州多加羅田ニ退キヌ因テ忌部氏ノ

二流也

河野氏 富田浦往古ノ地頭 天正後迄モ当地ヲ領シ又

八幡宮ヲ守護セリ 有故嫡家ハ退去スニ男等家相

統テ莊官ヲ勤ム当家ハ伊予国ニ於テ孝靈天皇第五皇

子彦狭島命 下伊与任藩屏將 軍一称伊与皇子 是ヨリ四拾貳代河野四

郎通信カニ男河野二郎通久承久三年軍功ニ因テ阿波

国富田莊ヲ賜ハリ以來同所ニ住ス 國中河野武市越

智等多当家ノ末流ナリ今ハ其家甚タ微ナリ 三好大

状曰武市殿源氏紋吉山添紋三平地幕紋七ツ星河野越

智同前也此家ノ姓源藤平ノ三姓ニ交ル然トモ中比通

信ノ祖父源ノ頼義六男三島六郎親清ヲ養子トシテ以

来カ未詳

井開氏 佐那河内村大宮并觀松彦ノ神ノ国造ニ下リ玉

フ旧事紀曰長国造志賀高穴穗朝觀松彦色立命九世孫

韓背足尼定賜国造云云

按ニ志賀高穴穗ノ朝ハ成務天皇ノ御宇也 家起リテ

今ニ至リ凡二千年ニ近カラシ中比武家ニ交上八万村

鬼神嶽ノ城ニ籠リシ事アリ

菅藤氏 芝原村 但シ芝原ハ則上 菅藤勘三郎民間ニ下今

ニ家存スト云ヘ共甚タ微ニシテ知ル人ナシ然レ共其

先祖穗日命ノ末人皇五拾二代嵯峨天皇朝日本後紀曰

弘仁三年文章博士從五位菅原朝臣清公為兼阿波守云云

佐々木経高の
入部

文治元年十一月、阿波、淡路、土佐三国の守護に任ぜられた佐々木経高は、翌年阿波に入部し、石井町の白鳥に鳥坂城を築き、ここを本拠として三国を支配することになった。また現在の徳島市域で中央部をしめるとみられる富田荘をはじめ、国内の荘園や公領にも地頭が補任されて、阿波は鎌倉幕府の支配を受けることになる。しかし、阿波に入部した佐々木経高をはじめ、地頭たちは、それぞれ荘園を横領して、自分の利益をはかろうとした。たとえば富田荘の領主大江泰兼は、経高が入部してろうぜきを働いたということを、鎌倉幕府に訴え、その訴えに対して幕府は、乱暴ろうぜきを停止させるとの、將軍家下文を与えている。また平康頼は、麻殖保の保司職を得たが、地頭の野三刑部丞成綱の横領があつて、中分(土地を半分にわける)したこともあり、阿波でも古代的な権威が、しだいに崩れつつあつた事情を物語っている。

これは幕府の歴史を伝える「東鑑」の巻八、文治四年の条に出ているものであるが、そのように地頭の荘園への侵略は、しだいはげしさを加えた。その侵略法は、地頭請といつて荘園の年貢を地頭がうけおい、そのかわりに荘園の領主から荘園の下地の支配権を得ていくもの、または麻殖保の例のように荘園領主と地頭との争いの結果、幕府の判決によるか、あるいは当事者同志の合意によつて、荘園の下地を二分して、地頭が荘園を所領化するという二つの方法がとられた。そのようにみてくると、日本の中世史は古くから権威を持っている公家の勢力と、新しく支配権を得た鎌倉幕府を頂点とする武家政権とが、しのぎをけずる歴史であつたということができよう。

承久の変と阿
波の事情

さしも権勢を誇つた源氏の政権も、わずか三代で滅びてしまった。三代將軍源実朝が、鎌倉の鶴岡八幡宮で暗殺されたことは、史上有名な話である。源氏が滅んだ時期に、政権を再び公家の手に奪いかえそうとする動きが、京都を中心に急速にたかまってきた。その中心となつて計画を進めたのは、後鳥羽上皇である。しかし倒幕の動きは、やがて源氏に代つて権力を握っていた、執権北条氏に見やぶられ、幕府は逆に京都に

徳島市市史一巻総説編、徳島市史編さん室 48/10

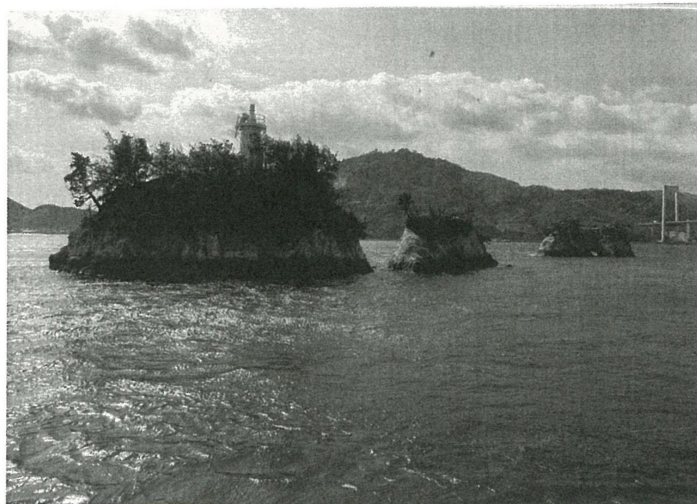
攻めのぼった。史上有名な承久の変である。この事変で幕府の実権は完全に執権北条氏に移った。阿波の守護佐々木経高が、後鳥羽上皇の倒幕計画にはせ参じたので、幕府はあらたに小笠原長清を守護として、阿波に入部させた。

新しい守護小笠原氏を迎えうった佐々木経高は、名西郡鬼籠野おろの（今の神山町）の「弓折れ」で、戦いにやぶれて自害して果てる。経高の子高重も宇治で戦死した。この事件のあと新たに任命された地頭は、それ以前の本補地頭に対し新補地頭といい、荘園の下地一一町歩に対して一町、すなわち一分の一の領有が認められ、ここに地頭の領主化が実現する。

こうして地頭勢力の成長に反して、荘園領主の力は、しだいに低下し、ますます激しい荘園侵略に直面しなければならなくなる。また、この機に乗じて荘園内の領主たちのなかには、地頭の被官となって武士化し、小領主となって成長しようとする動きが、にわかに活発になってくる。もちろん徳島市の各荘園のなかにも、そのような大きな社会的変化が見られるようになった。

たとえば承久の変の後、鎌倉方として功績のあった伊予の河野通久は、富田荘の新補地頭となったが、伊予の土地と交換して帰った。その後、文永九年二七に河野通純が、再び富田荘の地頭となって、これから六〇年余りの間在任した。この六五年間における地頭河野氏についての研究は、すでに島田泉山が「徳島市郷土史論」において、くわしく報告している。

それによると、わずか六五年という短かい期間であるが、河野通純時代の遺物や、遺跡が相当残っていることわかる。たとえば三島神社がその一つである。河野氏の氏神は大山祇神社おおよまである。この分霊をまつたのが三島神社である。おそらく地頭の通純が入部して、最初に富田荘内に鎮守として、三島神社を建てたのであろう。この三島神社には、朝鮮半島の様子を伝える狗犬こまいぬがあり、河野氏時代の遺物の一つとみられている。



山頂に灯台が設置されている鶏小島。周囲は船折瀬戸と呼ばれる特に潮流の速い海域

三島村上と合従連衡

鞆の浦から西に向かうと、すぐに芸予諸島の島々が見えてくる。現在では、尾道から今治まで、芸予諸島を縫うように通された西瀬戸自動車道、いわゆるしまなみ海道が走っている。この美しい島々が、戦国時代に最強の水軍と呼ばれた村上水軍の本拠である。村上水軍とは、能島村^{のしま}上家、来島村^{のしま}上家、

因島村上家の三家の水軍のことで、過去にはそれぞれが異なる勢力に加担した時代もあれば、協力して戦った時もある。

その起源については諸説あり、確定はしていない。いつの頃からか、村上家は能島、来島（ともに愛媛県今治市）、因島（広島県尾道市）を拠点とする三家が有力となり、これらは三島村^{さんとう}上家と呼ばれるようになる。

① 南北朝、室町時代と、伊予の河野家が海上勢力をまとめ、村上家

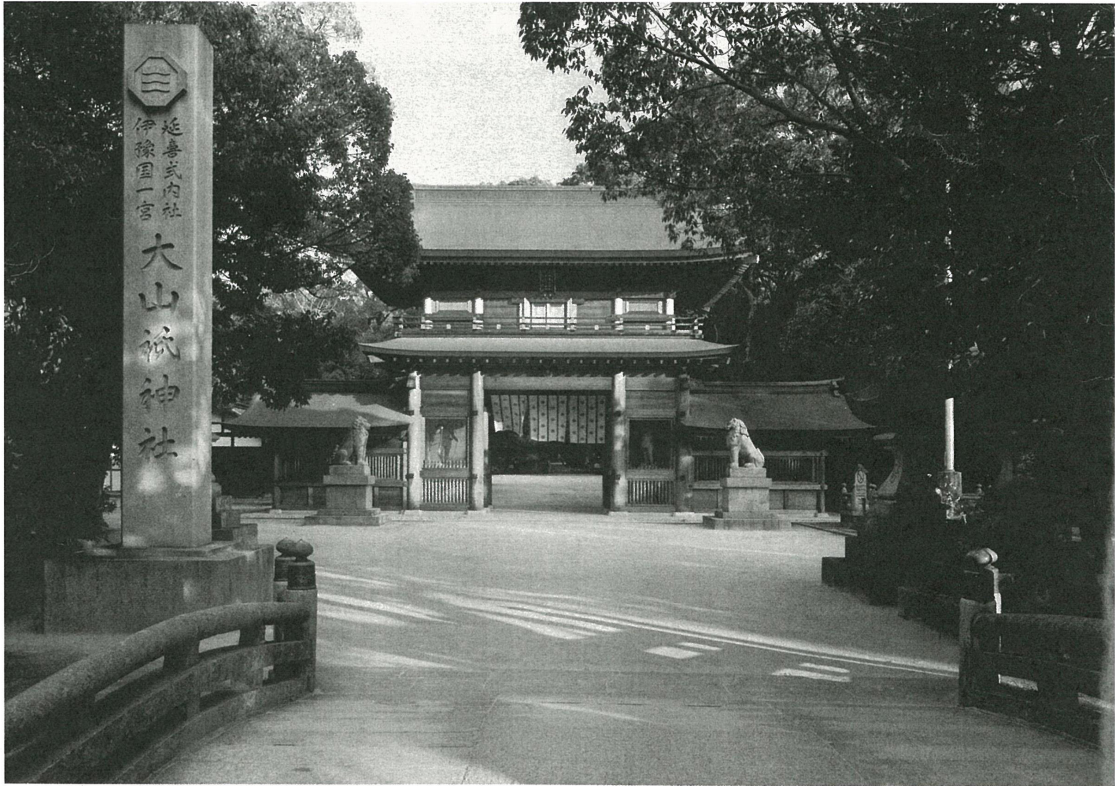
もその家臣団に編成されていた。戦国時代中期に入ると、因島村上家は毛利家の分家となつた小早川家に従い、来島村上家は河野家に従い、つづも半独立と、それぞれの道を模索した。河野家の勢力が衰え、毛利家が中国の覇者として勢威を振るうと、三家はこれに協力している。秀吉の時代になると状況は大きく変化し、来島村上家は秀吉に臣従して大名となり、能島村上家は小早川家家臣となり、後に毛利家の家臣に、因島村上家も毛利家の家臣に編入された。彼ら村上水軍が信奉していたのが、大三島^{おほみしま}（今治市）に鎮座する大山祇神社である。祭神を大山^{おほやま}積神とする神社で、朝廷からは「日本総鎮守」の号を下賜されている。三島喜徳宮司に、水軍と大山祇神社についてお話をうかがうことができた。



② 武家が信奉した大山祇神社

「当社と水軍とのつながりとしては、伊予の河野家の氏神であったという点が重要です。当社の祭祀にたずさわったのが、伊予小市^{こいち}国造^{くにのみやつこ}の越智^{えち}（古くは小市・小千とも）家ですが、河野家と越智家は同族です。元寇の折に活躍したことでも知られる河野家が、村上家を含む瀬戸内海の水軍を束ねていました。水軍については、海賊といった呼ばれ方をすることもありますが、西洋で海賊と呼ばれる『海の盗賊』とは違います。むしろ、朝廷などが荘園から物資を輸送する時、盗賊からそれらを守るように警護を命じられたのが水

源頼朝が奉納した国宝「紫綾威鎧・大袖付（むらさきあやおどしよろいのおおそでつき）」 大山祇神社蔵



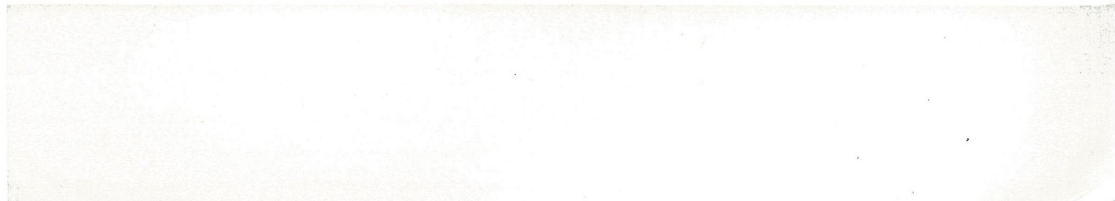
上／山の神・海の神・豊穡の神として、朝廷や武家の尊崇を集めた大山祇神社。名だたる武将が奉納した刀剣・甲冑など、美術品多数を所蔵し、武具においては全国の国宝・重要文化財の8割を有している 左／大山祇神社宮司の三島喜徳さん

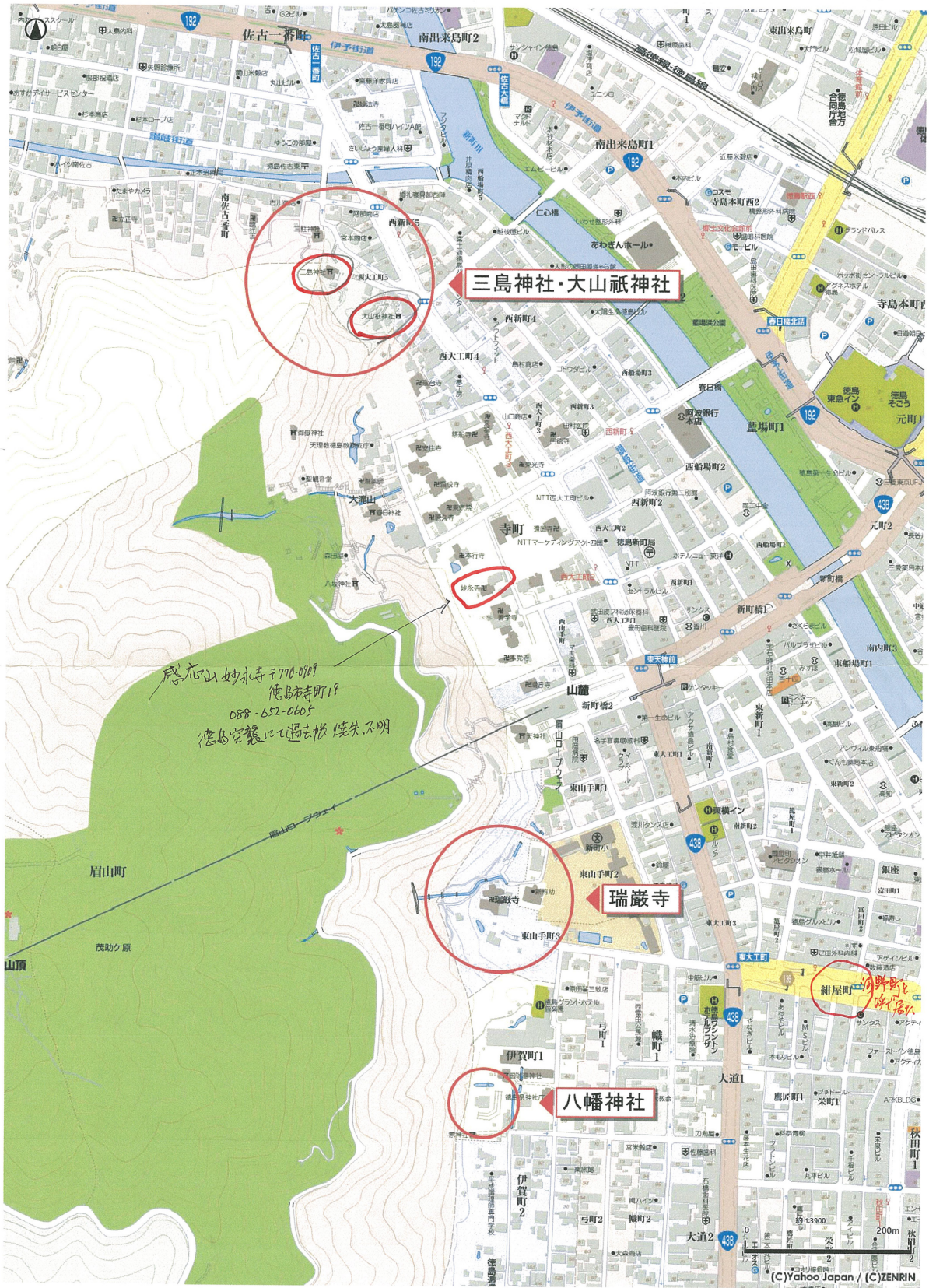


軍なのです。

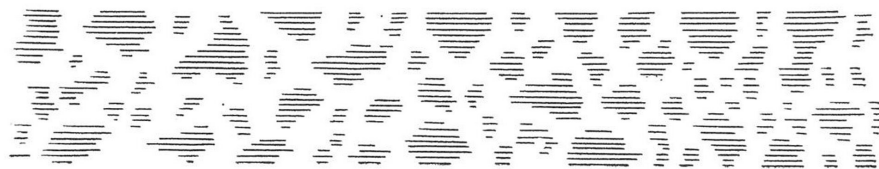
当社には、源氏や平家の武将の参拜や奉納が多く、水軍として名高い河野家が氏子という方もあって、戦いの神様と勘違いされている方もおられます。しかし、大山積神は山の神・農業の神様で、戦いの神様というわけではありません。『伊予国風土記』には、『大山積の神、一名を和多志の大神』とあり、渡し、つまり航海の神様でもあるので、水軍が特に信奉したようですが。ほかにも鉾山や林業、酒造の神様でもあるので、かなり神徳は幅広いですね(笑)

③ 大山祇神社には膨大な量の奉納品があり、それらの一部は宝物館などに展示され、見学することができます。源頼朝、義経、河野家らが奉納したと伝わる甲冑や刀剣といった武具。唐の時代の鏡、仏教の経文など、その質の高さと量に圧倒されてしまう。いくつもの国宝、





富田荘 河野屋敷跡



第五章 教職員

一 歴代校長……………三〇

二 教職員……………三三

三 学校医……………四〇

第六章 卒業生

一 卒業者数……………四三

二 卒業生名簿……………四六

第七章 児童

一 身体状況……………一〇

第八章 教育後援・協力団体

一 会長・副会長……………一九

二 規約・組織・事業……………二三

三 会計……………二五

思い出……………二七

在校生……………二八

編集後記

第一章 沿革

一 沿革概要

わが加茂名小学校が明治六年三月六日、島田村河野道次郎方において「時中学校」の名をもって、創立されて以来、ことごとく開校百年を迎えることとなった。創立以来、時代の進展に伴い、学校名・校地・校舎・校区等に幾多の変遷はあったが、いずれの時代においても、本校区児童の教育の殿堂であり、幾多の人材を育成し、徳島市の発展はいうまでもなく、黎明の日本の前進と日本民族の幸福増進のため、多大の貢献を続け現在に至っている。

これは、校区が県郡の中心部に位置し、文化水準が高く、教育の進展に伴う施設が他地区に先行して実施される長所をもつとともに、これにふさわしい学校長・教職員を得たからであろう。卒業生はすでに一万五千人に垂々としているが、いずれも時代の要請する人材として活躍を続け、全国的に著名の士も決して少なくない。

次に本校百年の歩みを、明治・大正・昭和前期・昭和後期に大別して、その概要を述べることにする。

(一) 明治時代

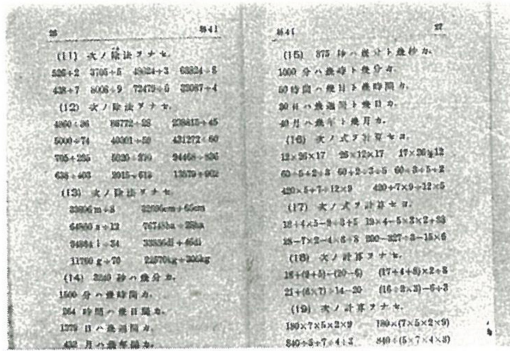
明治時代は、日本の寺小屋、私塾等の庶民教育を基盤にした初等教育が次第に制度として確立し、六か年の義務教育が普及し完

成した時代といえる。わが国の小学校の多くは、明治五年八月に頒布された学制に基づき、明治六年以後に設立されたのであるが本校も、明治六年三月六日、島田村に創立されたのである。職員は河野道次郎・東条礼三の両氏である。学制にそえて公示された「被仰出書」の「自今以後一般人民必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」との趣旨に基づき発足したのである。

この頃は、上下二等の小学（下等小学は六才〜九才、上等小学は十才〜十三才各四か年間就学）に分かれ、男女ともなるべくこれを卒業させるよう督学したけれども、未だ確然とした義務教育の制をとるに至らなかった。

明治十八年十二月、内閣制度が創設せられ、森有礼が文部大臣に任ぜられると、国家主義の立場から教育制度の大刷新を断行し、明治十九年にいわゆる「学校令」が発布せられた。初等教育に関しては、十九年四月に小学校令が定められ、これにより名東小学校一校にて教育を行っていたのが、同九月五日、名東・島田・蔵本・庄の四校を復興させ、教育を実施することとした。

明治二十三年十月、教育に関する勅語が渙発せられ、わが国教育の基本が確立せられた。同月発せられた改正小学校令第一条には、「小学校は児童身体の発達に留意して道徳教育及国民教育の



算術

むかし、習っていた、算術・地理・理科の教科書のいろいろです。
算術とは今の算数のことです。地理とは今の社会科です。時代の移りかわりとともに、学習する内容はば広くになりました。

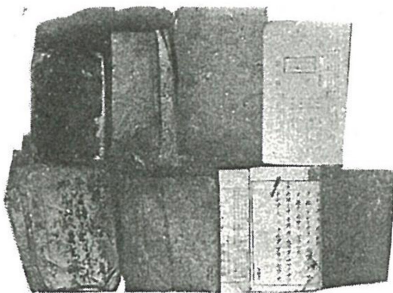


地理



明治・大正・昭和に習っていた、教科書のいろいろです。「よみ」「かき」「そろばん」の江戸時代の寺小屋式から、明治六年には、学校が創立され、木版印刷による教科書が使われ時代の進むにつれ、印刷技術がすすんできたのです。

理科



第二章 校地・校舎

| 校地・校舎 | 設置年代 | 校地・校舎 | 設置年代 | 校地・校舎 |
|------------|-----------|---------------------------|------------|---|
| 時中小学校 | 明治六、三、六 | 河野道次郎宅に設置 | | |
| 〃 | 〃 七、四、一 | 島田村本願寺に移転 | | |
| 明治学校 | 〃 八、一、一〇 | 庄村正善寺につくる | 明治三三・七・五 | 校舎を増築上棟式を挙行する |
| 蔵本小学校 | 〃 | 蔵本村地福寺に設置 | 〃 三六、九、一八 | 校地拡張（一反四畝二二歩） |
| 日進小学校 | 〃 | 西名東村大原瑠璃宅に設置 | 〃 四〇、六、一九 | 増築校舎落成式 |
| 観愛小学校 | 〃 | 東名東村佐藤秀宅に設置 | 〃 四三、九 | 補習教室を新築 |
| 島田小学校 | 〃 一五、四、一七 | 山本久平宅に設置 | 〃 四四、九、一 | 校地拡張（一反二二歩） |
| 庄村小学校 | 〃 〃 七、三 | 若宮神社跡につくる | 大正 四、二、二八 | 校地拡張（四畝二六歩） |
| 蔵本小学校 | 〃 〃 八、一五 | 現在の蔵本町松家氏宅に設置 | 〃 一一、一、二二 | 校舎一六〇坪増築 |
| 名東小学校 | 〃 一六、四、七 | 袋井用水西南付近に設置 | 〃 一一、一、二、四 | 校地拡張（一反五歩） |
| 庄小学校 | 〃 一九、九、五 | もとの位置に復校する | 〃 一三、四、三〇 | 校舎一二〇坪増築落成 |
| 〃 | 〃 二一、九、一 | 庄・蔵本・島田・東西の名東を一括し、加茂名と称した | 〃 一四、四、一六 | 校舎一一九坪増築落成 |
| 庄尋常高等小学校 | 〃 二四、四、一 | 島田・名東・蔵本の分教場の合併 | 昭和 三、一、二三 | 校舎二二坪六教室を増築し新校舎（十教室）一棟落成 |
| 加茂名尋常高等小学校 | 〃 三〇、四、一二 | 庄・蔵本・島田・東西の名東の全五か村を合併する | 〃 三、五、二六 | 旧運動場に隣接し一町歩（南側二段歩水田を残し）の運動場を拡張し、トラック、フィールドを設置する |
| 〃 | 〃 三〇、五、二五 | 開校式挙行、以後、この校名がつづく | 〃 五、九、一四 | 運動場全部の地上げ盛土をし、体操競技用具を新設する |
| | | | 〃 七、八、一 | 徳島県名東郡加茂名尋常高等小学校と改称 |
| | | | 〃 一〇、五、二九 | 校舎改築竣工（昭和九年八月二日起工） |

加茂名尋常高等小学校時代の校地・校舎の拡充

加茂名町

場所 加茂名町鮎喰（鮎喰町二丁目市営住宅小松園）
建物 木造平屋瓦葺、一部二階建。

本館—事務室、医務室、取締人室、病室（四室）二〇ベッド。付属—炊事室。

(3) 庄山火葬場

。沿革 場所 加茂名町庄山路（現加茂名町船ヶ谷—法谷寺西裏山）

- ・創設 明治三十年頃、徳島市佐古町一丁目、栗山某が県の許可を受け設立。
- ・部落経営 大正六年（流行性感冒の盛んな年）庄山路部落経営とし、施設改善した。
- ・住民持株制—戸当り一株五十銭を三十株乃至二十株宛とした。
- ・火葬料を庄山路部落の年間経費に充当、剰余金は持株に配当する。
- ・施設構造
- ・火葬場—木造平屋瓦葺 四〇坪
- ・窯 —特等……二基
並等……四基
- ・従業員住宅—木造平屋瓦葺 一五坪

。解散

昭和八年、国府町岩延火葬場新設に当り火葬場権利を譲渡し、本火葬場は閉鎖解散した。

五 文 化

(一) 教 育

(1) 学校教育

・加茂名小学校の沿革

最初の学校 明治五年の学制により明治六年三月六日、島田村河野道次郎宅に時中小学校を開設する。

明治八年十一月十日 学制改正により

明治 学校——庄村正善寺、通学区庄村島田村

明治十年より庄村小学と改称、明治十二年四月より庄村小学校と改称

藏本小学校——藏本村地福寺、通学区藏本村

環愛小学校——東名東村佐藤秀方、通学区東名東村（明治十年に環愛学舎と校名変更）

日進小学校——西名東村大原瑠璃方、通学区西名東村

教育令の発布により

島田小学校新築——明治十五年四月十七日（現中島田町三丁目山本久平宅）

庄村小学校新築——明治十五年七月三日（現庄村三丁目若宮神社跡）

藏本小学校新築——明治十五年八月十五日（現藏本町一丁目松家宅）

には八万小学校の学級数が四五学級・児童数が一八〇〇名にも達して教室が不足したので、止むなくプレハブの応急教室を設置して急場をしのいだのである。このような状況のなかで地元は、早くから徳島市に対して小学校の新設を要望をしていたが、漸く同五十一年度に校地買収費と校舎建築費が市議会で承認された。

昭和五十二年（一九七七）四月一日に園瀬川沿いの八万町橋本一―一番地に八万南小学校が新設された。当初の学校の規模は、校地面積が一万七四五八・六一平方メートル（買収造成費七億五五〇〇万円）、校舎面積は四六五九平方メートル（鉄筋三九三九平方メートル・鉄骨七二〇平方メートル・建築費三億九一四六万四〇〇〇円）、教職員数は榑本填雄校長以下三二名、学級数は二〇学級、児童数は六八一一名（男三六〇名・女三二一名）で八万小学校から転校してきた。このため校区内の八万小学校の南分教場・西分教場は廃止されている。同五十五年に鉄骨校舎五平方メートル、翌五十六年には鉄筋校舎八二七平方メートル（建築費八七七一万円）が増築された。

加茂名小学校

徳島市庄町五丁目一九番地に位置する市立小学校である。校区は、庄町・南庄町・鮎喰町の一部・北島田町・中島田町・南島田町・蔵本町・蔵本元町・南蔵本町・加茂名町の一部などであった。平成三年度における学校の規模は、校地面積が二万一〇三四平方メートル（うち運動場九三〇三平方メートル）、校舎面積は五五五九平方メートル（鉄筋四八五七平方メートル・鉄骨七〇二平方メートル）、教職員数は板東正則校長以下三九名、学級数は二学級、児童数は六五一一名（男三二一名・女三二四一名）である。

加茂名小学校の前身は、明治六年（一八七三）三月六日に第一大区



平成3年（1991）の加茂名小学校

(名東郡) 八小区島田村(現徳島市北・中・南島田町)の河野道次郎方に設立された私立時中小学校である。校主は河野道次郎であった。『文部省年報』によれば、同六年に八小区蔵本村(現蔵本町三丁目)の地福寺に私立蔵本小学校が設立されている。時中小学校は翌七年四月一日に八小区島田村(現南島田町一丁目)の本願寺に移転しているが、このときの教師数は二名、児童数は九七名(男八四名・女一三名)であった。この年に八小区西名東村(現名東町)に私立時彰(日進)小学校が設立され、また、翌八年には八小区東名東村(現鮎喰町)の佐藤秀太郎方に私立環愛小学校が設立されている。

『文部省年報』によると、時中小学校は明治八年(一八七五)に私立小学校から八小区の公立小学校となり、八小区庄村(現庄町二丁目)の正善寺に移転しているが、教師数は三名、児童数一〇三名(男八六名・女一七名)となっている。翌九年に時中小学校は庄村小学校と改称し、教師数は一名、児童数は一四七名(男一一五名・女三二名)であった。同十年には校名から「校」の字を削除して庄村小学と改称し、西名東村の時彰(日進)小学校を統合したので、教師数は三名、教場は五室、児童数は百八十五名(男一四六名・女三九名)に増加している。同十一年から同十二年五月までの間に東名東村の環愛学舎(元環愛小学校)も庄村小学に統合された。

明治十四年の『徳島県統計書』には、庄村小学が既に明治小学校と改称され、蔵本村の蔵本小学校も統合されて蔵本分校となり、東名東村・西名東村にもそれぞれ分校が設置されたと記述されている。さらに明治小学校の教師数は四名(訓導二名・助手二名)、児童数は五〇九名(男四一五名・女九四名)、蔵本分校の教師数は助手一名、児童数は五五名(男四五名・女一〇名)、東名東分校の教師数は助手一名、児童数は七三名(男五八名・女一五名)、西名東分校の教師数は助手一名、児童数は五三名(男四一名・女二二名)と記している。

明治十五年に明治小学校は庄村小学校と改称し、蔵本分校は分離独立して蔵本小学校に昇格し、東名東分校と西名東分校は合併して名東小学校を設立、新たに島田村に島田小学校を設立している。これらの小学校は、いずれも校舎

河野家の過去帳から

徳島市第一巻総説編、徳島市史編さん室

昭和四十八年十月、資料から六阿波武士団の成立、源平の合戦に一一八五年文治元年平家譜代の家臣田口成良により、源氏に味方する。伊予河野氏を倒したとあり河野家が初めて記録される。その後一二二一年承久の変の後鎌倉方として功績のあった伊予の河野通久は阿波富田庄の新補地頭となるが、伊予の土地と交換して帰る。その後一二七二年文永九年に河野通純が、再び富田荘の地頭となってこれから六十五年間、短い期間であるが、河野通純時代の遺物や遺跡を残している。徳島市の中心に近い寺町に河野家の氏神大山祇神社の隣に分霊をまつたのが三島神社がある。この寺町に我が過去帳の古い方に御初代市左衛門なる戒名、圓空院入玄道融居士、一六六九年寛文九巳酉年閏十二月廿六日没、行年六十七才が日蓮宗妙永寺が在る。この時代以後は菩提寺に記録されているが、戦災で焼滅して、記録が残されて無し、戒名から察すると、古い過去帳の最後の戒名は、文化三丙寅年十二月廿八日没、圓理院真覺道源居士、御六代亀蔵様行年二十六才とある。妙永寺、本妙寺は淡路の洲本に移転したと在る。この後の菩提寺は、島田村の本願寺に移っている。この過去帳で一番古い名前河野伊右衛門、戒名芳月浄慶信士、元禄十二年十月二日没とある。伊右衛門の妻、戒名候冷妙需信女とあり、本願寺の最初の名前から現在までの家系が記されている。この過去帳の中で特筆すべきは、第二章、近代の教育に、現在の徳島市庄町五丁目十九番地に位置する加茂名小学校を、河野道次郎が明治六年（一八七三）三月六日河野道次郎方に設立された私立時中小学校である。校主は河野道次郎であった。道次郎の戒名は、明治三十二年八月二十五日蔦七月二十日。精雲院弘徳徹翁居士、河野道次郎直良号友竹享年八十二才とある。自分の曾祖父になる。この加茂名小学校へ我等兄弟四人も卒業する。自分は昭和二十五年から六年間通学する。

過去帳の古いのが妙永寺、御初代市左衛門行年六十七才で寛文九巳酉年（二六七〇）、新しい本願寺過去帳の伊右衛門が元禄十二年（一七〇〇年）十月二日没とある。古い過去帳と新しい過去帳のはじまりが三十年の差しかなく、古い過去

帳の最後の人物は文化三年（一八〇七）まで重複する。菩提寺が二ヶ所になっている。古い過去帳の戒名は、領主様か地頭クラスの人物と思われる。現在の妙永寺の住職様がいうには当時は普通の人物の戒名は四文字か二文字位との事なので立派な人物と思われるとの事。詳しくはこれ以上今の所判明しないが、今後愛媛県今治の大山祇神社に資料が残っていて人物が合致すればと期待する。